

守り、育て、活用して 琵琶湖のヨシ原を残す。

琵琶湖の風景に欠かせないヨシ原。

かつてヨシは人々の暮らしに身近な存在でした。

戦後、ヨシの需要が激減し、ヨシ原が荒れていくなか、

琵琶湖環境に寄与するヨシの機能が見直されてきました。



西の湖のヨシ原

ヨシはイネ科ヨシ属の多年生草本で、日本各地の湖沼、河川など水辺に生え大群落を形成します。ヨシが茂る風景は、かつて日本の至るところで見られ、古くから人々に愛されてきました。

ヨシ原が広がる近江八幡市円山町の西の湖水郷地帯に、江戸時代からヨシの卸業を営む西川嘉右衛門商店があります。「以前は円山町の農家のほとんどが農閑期にヨシ生産を生業にしていた。ヨシはお米よりも高値で取引されていたんですよ」と語る17代目西川嘉廣さん。ヨシはよしずや屋根、家具などに、また旺盛な生命力と浄化作用から破魔矢など神事に用いられていました。人々にとって、ヨシは身近な存在であり、暮らしに深く関わっていたのです。



西川嘉廣さんが2001年に土蔵を改修してヨシ博物館を開館。「ヨシの文化」をテーマに文献資料や物品を展示している（撮影時は近江八幡市立資料館にて展示中）

ヨシの多面的機能が 琵琶湖の環境を守る

春に芽吹き、夏までに4m近くも伸びるヨシを、冬に刈り取り、早春にヨシ焼きを行う。このサイクルが繰り返されることでヨシ原は良い状態に保たれてきました。

しかし、戦中・戦後の食糧増産のための埋め立てや干拓、開発によってヨシ原は激減。また生活スタイルの洋式化や安価な中国産ヨシが輸入されるようになったこともあり、ヨシ業も急速に衰退していきました。ヨシ原の放置が目立つようになると、近年ヨシが持つ機能的な重要性が注目されるようになりました。

ヨシには、水中の窒素やリンを養分として吸収する作用、水中茎に付着する微生物による有機物の分解作用などの水質浄化機能があります。またヨシの密生する場所は鳥類や魚類など多様な生物の産卵場所や隠れ場所になり、生態系保全の面でも重要です。そのほか湖岸の浸食防止など様々な機能が認識されるようになり、ヨシ群落の保全や面積拡大に向けた動きが活発になってきています。

ヨシ群落の保全のために 「活用する」がキーワード

大津市では、1990年から市主催の市民ヨシ刈りが始まり、現在では地元自治会の他、家族、小中学校、企業単位で応募されたたくさんの方がボランティアとして参加しています。

このヨシ刈りに毎年参加する市民団体「ヨシネットワーク」では、ヨシ工作教室やヨシ笛の演奏会を行い、参加された人たちに楽しみながらヨシについて考えるきっかけづくりをしています。「滋賀に住む人は、多かれ少なかれ琵琶湖に特別な想いを抱いています。少しでも子どもたちがヨシ、琵琶湖の環境に関心を持つてくれれば」と事務局長の鳥飼和夫さんは話します。

滋賀県では1992年に「滋賀県琵琶湖のヨシ群落の保全に



寒空のなか、子どもから大人までボランティアが集まり手作業で行われるヨシ刈り（撮影場所は西の湖）

安土町商工会「よしきりの会」では、「ヨシ原が広がる西の湖の景観を守りながら、町おこし」を目指し、水郷地帯に古くから伝わるヨシちまきをはじめ、刈り取ったヨシの若葉を粉末にして練り込んだ特産品を次々に開発。イベントへの出品や安土町内で販売もされ、消費者の反応は好評です。

琵琶湖のヨシ原を後世に受け継いでいくために、行政、事業者、県民、それぞれの立場から、ヨシ保全へのアプローチが進められています。



「よしきりの会」が開発したヨシジェラート、ヨシ茶など様々なヨシ製品。ヨシにはビタミンCが豊富